



## 種まく人

フィンセント・ファン・ゴッホ  
《種まく人》1888年 油彩・カンヴァス ファン・ゴッホ美術館(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)蔵  
©Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)



右の図版  
上/フィンセント・ファン・ゴッホ《花魁(溪斎英泉による)》(部分)  
1887年 油彩・綿布 ファン・ゴッホ美術館(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)蔵  
下/二代 歌川芳丸《新板虫尽》(部分) 1883年 木版、紙(縦大判錦絵)  
ファン・ゴッホ美術館(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)蔵  
©Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)



# ゴッホ展

巡りゆく日本の夢

# Van Gogh & Japan

PRESS RELEASE

図版/フィンセント・ファン・ゴッホ《花魁(溪斎英泉による)》(部分) 1887年 油彩・綿布 ファン・ゴッホ美術館(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)蔵  
©Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)



# 見果てぬ日本の夢 その絵物語

圀府寺 司 Tsukasa Koderu

「ビングの店には屋根裏部屋があって、そこには1万枚はあろうかという浮世絵がある。」

ファン・ゴッホはパリの画商ビングの店の屋根裏部屋で大量の浮世絵と出会い、それらに魅せられ、それらを研究するとともに、「日本の夢」の中に没入していきながら南仏アルで多くの傑作を描きあげていきました。そして「耳切り事件」の後、その夢が遠ざかる中、サン・レミ、オーヴェールでも傑作を描きつづけ、日本への関心も持ち続けていきました。夢はそこで、画家の死によって断たれます。しかし、消え去ってはいなかった。数十年の時を経て、その夢にふれた日本の画家たちが今度はファン・ゴッホにふれることを夢見て、ファン・ゴッホ終焉の地オーヴェールに次々に巡礼に訪れ、芳名録に言葉や絵を残していきます。それは時空を越えて巡った夢の物語、日本の夢の生成と転生の物語と言ってよいでしょう。

本展覧会は6年にわたる準備期間をかけ、アムステルダムのファン・ゴッホ美術館のスタッフたちとも綿密な打合せを重ね、世界各地のコレクションと交渉しながらつくりあげた展覧会です。日本3会場の後にファン・ゴッホ美術館でも開催され、カタロ

グも日、英、蘭など数か国語で出版され、新しい知見や情報が数多く盛り込まれた学術的価値の高いものになります。

ファン・ゴッホ展をはじめ多くの展覧会企画を手掛けてきたコルネリア・ホンブルクさんにもゲスト・キュレーターとして加わってもらい、各地の美術館や個人コレクターのもとに何度も足を運んで困難な出展交渉をしてもらいました。今回日本で初めて見られる傑作、美術通の方々もこれまで見る機会がなかった作品、今回見逃すともう見られないかもしれない作品、さらには、初公開をふくめた貴重な資料や浮世絵作品が集まります。

ファン・ゴッホの「日本の夢」、つわものどもの見果てぬ夢の絵物語にふれ、夢のつづきを紡いでいただければ幸いです。



圀府寺 司 こうでら つかさ

大阪大学文学研究科教授。大阪大学文学部卒業。1981～88年、アムステルダム大学美術史研究所留学、博士(文学)取得。博士論文によりオランダ・エラスムス財団エラスムス研究賞受賞。広島大学総合科学部助教授などを経て、2001年より現職。おもな著書にVincent van Gogh. Christianity versus Nature. Amsterdam-Philadelphia 1990.、『西洋絵画の巨匠2 ゴッホ』『ファン・ゴッホー自然と宗教の闘争』(以上、小学館)、『世界美術大全集 第23巻』(共著、小学館)、『もっと知りたいゴッホー生涯と作品』(東京美術)、『ゴッホー日本の夢に魅了した芸術家』(角川文庫)、『ああ、誰がシャガールを理解したのでしょうか』(大阪大学出版会)、『ユダヤ人と近代美術』(光文社)。主な展覧会企画、カタログ執筆に『ゴッホ展』(北海道立近代美術館、兵庫県立近代美術館 2002年)、『ゴッホ展』(東京国立近代美術館、国立国際美術館、愛知県美術館 2005年)がある。

## ファン・ゴッホ美術館と初の本格的共同企画!

## ゲスト・キュレーターからのメッセージ

# ファン・ゴッホと日本 世界から選びぬいた逸品

コルネリア・ホンブルク Cornelia Homburg

「ゴッホ展 巡りゆく日本の夢」は東西の研究者たちによる国際共同企画の成果です。ファン・ゴッホ美術館、クレラー=ミュラー美術館、プリンストン大学美術館、メトロポリタン美術館といった世界の名だたる美術館が所蔵する油彩とデッサン、ならびに個人コレクションに入っていてほとんど公開されない作品等が一堂に会する場となります。

本展覧会では、ファン・ゴッホの日本崇拜と、1887年以降の画業で重要な位置を占める日本美術への関心とが、時とともにどのように深まり、どのように彼の作品の特質となっていくのかを探ります。パリでファン・ゴッホは前衛芸術にとって日本が重要な意味をもつことに気づき、日本とその文化を夢中になって受け入れ、自分の必要に応じて取り入れるようになりました。

1888年には南仏へと旅立ち、クロード・モネ、ポール・セザンヌ、ポール・シニャックら南仏に赴いた同時代の画家たちにつづくことになりました。アルルでファン・ゴッホはめきめきと自信をつけ、日本と南仏を独自のやり方で組み合わせることで、モダン・アートに寄与する何か新たなものを得たと思うようになりました。ファン・ゴッホの中で日本は、レンブラントやドラクロワ、ミレー、ドーミエら、彼が模範としていた画家たちに連なる位置を占めるようになり、同様に、ピエール・ロティの『お菊さん』のような異国趣味的主題を扱った文学作品も、彼が愛

読していたドーデからゾラまでの作家たちの作品に加わるようになりました。

日本は、ファン・ゴッホの画業の最後に至るまで、彼の芸術観のなかに生きつづきました。そして、ポール・ゴーガンとの共同生活が破局を迎え、1888年12月に最初の精神病の発作を起こした時にも、それは失われることはなかったのです。1889年以降ファン・ゴッホは再発する病のため、自信を失ったり取り戻したりをくり返しましたが、1889年から1890年の間に描かれた油彩やデッサンの多くは、彼の日本への関心を反映しつづけています。この時期の作品は、日本の美術や芸術家に対する賞賛が、いかにファン・ゴッホを新たな表現形式の探求に駆り立てていたかを明らかにしてくれています。ゴーガンやベルナールといった友人たちとの交流もまた、日本美術への敬意を共有することで支えられていたのです。



コルネリア・ホンブルク Cornelia Homburg

インディペンデント・キュレーター。専門はファン・ゴッホおよび19～20世紀初頭のヨーロッパ美術。シカゴ大学(1985年、修士)、アムステルダム大学(1994年、博士)で学び、ファン・ゴッホ美術館およびセントルイス・ワシントン大学で研究職についた後、セントルイス美術館学芸員、学芸副部長を経て、現在は北米およびヨーロッパの美術館や研究機関のゲスト・キュレーター、アドバイザーを務める。主な企画展に、『マックス・ベックマンとパリ』(セントルイス美術館、チュール美術館 1998年)、『フィンセント・ファン・ゴッホとアティ・ブルーヴァールの画家たち』(セントルイス美術館、フランクフルト・シュテーデル美術館 2001年)、『フィンセント・ファン・ゴッホ: 永遠の田園—近代の都市』(ローマ、ヴィットーリオ・エマヌエーレ2世記念堂 2010～2011年)、『ファン・ゴッホ: アップ・クロース』(オタワ・カナダ国立美術館、フィラデルフィア美術館 2012年)、『新印象派と現実の夢: 絵画、詩、音楽』(ワシントンD.C.、フィリップス・コレクション 2014～2015年)がある。展覧会図録への寄稿多数、ファン・ゴッホについての著書のほか、アムステルダムのマックス・ベックマン、20世紀ドイツ芸術などについての論文がある。現在、『オディロン・ルドン: 文学と音楽』展(クレラー=ミュラー美術館)、『ゴーガンの肖像画』展(ロンドン、ナショナル・ギャラリー、カナダ国立美術館)を含む複数のプロジェクトに携わっている。

## 超行動派、注目の ゲスト・キュレーター 日本初参戦

# VAN GOGH & JAPAN

● 第1部 ファン・ゴッホのジャポニスム ● 第2部 日本人のファン・ゴッホ巡礼

1853	0歳		フィンセント・ファン・ゴッホ、オランダ南部のフロート・ズンデルトに生まれる
1857	4歳		弟テオドルス・ファン・ゴッホ(愛称テオ)生まれる
1869	16歳	<b>画家の下地をつくった 西商時代</b>	グーベル画廊のハーグ支店に就職する(のちにロンドン支店、パリ支店にも勤務)
1872	19歳		この頃から、弟テオとの定期的な書簡のやりとりが始まる
1876	23歳		グーベル画廊を解雇される
1877	24歳		神学部に入る勉強のためアムステルダムに移る
1878	25歳		ブリュッセルの伝道師養成学校に仮入学するが正規入学は認められない
1879	26歳	<b>聖職の道での挫折</b>	ベルギーのボリナージュ炭鉱で伝道活動を行うが、常軌を逸した活動に対して、資格を停止される
1880	27歳	<b>そして、画家への転向</b>	画家になる決心を固める
1881-85	28~32歳	<b>修業の年月</b>	エッテン、ハーグ、ニューネンと転居しながら絵画制作にとりくむ ハーグ時代の書簡では、日本に滞在した画家フェリックス・レガメに言及している
1886	33歳		1月、アントワープの王立美術アカデミーに入る この頃の書簡で、浮世絵に対する関心を示し、浮世絵を部屋の壁に貼っている
		<b>パリへ 印象派と日本趣味</b>	2月末、突然パリの弟テオのもとにやって来る 印象派との接触
1887	34歳	<b>浮世絵との出会い</b>	カフェ「ル・タンブラン」で浮世絵展を開く ビングの店で大量の浮世絵を研究。英泉の《花魁》、広重の《亀戸梅屋舗》 《大はしあたけの夕立》の模写、背景いっぱい浮世絵を配した 《タンギー爺さんの肖像》を描く
1888	35歳	<b>日本の夢、南仏に求めて</b>	2月、日本を夢見て南仏に向かい、アルルに着く
			10月、「黄色い家」でのゴーガンとの共同生活が始まる
		<b>ゴーガンとの破局、 ユートピアの崩壊</b>	12月、ゴーガンとの口論の末、左耳を切り取る「耳切り事件」を起こし、 ゴーガンはアルルを去る
1889	36歳		5月、サン・レミの精神病療養所に入る
1890	37歳	<b>終焉の地オーヴェール 遠ざかる日本の夢</b>	5月、パリ近郊のオーヴェール＝シュル＝オワーズに移る。 医師ポール＝フェルディナン・ガシェが主治医になる
			7月27日、銃弾を受けて負傷 ピistol自殺か?
			7月29日、テオに看取られて永眠する
			7月30日、オーヴェール＝シュル＝オワーズの墓地に埋葬される
1891			1月25日、テオがユトレヒトの病院で他界。ユトレヒトの墓地に埋葬される。
1909			医師ガシェ他界。息子のポール・ガシェがファン・ゴッホの作品などを引き継ぐ
1910		<b>巡りゆく夢は、遠く日本へ</b>	日本で文芸雑誌「白樺」が刊行され、ファン・ゴッホに関する記事や 作品の複製図版が掲載される
1914		<b>日本人オーヴェール巡礼 のはじまり</b>	4月 テオの亡骸がユトレヒトからオーヴェールへ移葬され、フィンセントの墓の隣に埋葬される。 山本鼎と森田恒友が初めてオーヴェールのガシェ家を訪れ、ファン・ゴッホの素描作品を見る
1921			里見勝蔵、間部時雄、裕伊之助らがガシェ家を訪れ、コレクションを見る
1922		<b>芳名録のはじまり</b>	日本人のガシェ家訪問が「芳名録」に記録されはじめる
1929			オランダのクレラー＝ミュラー家コレクションの展覧会に佐分真ら日本人が訪れ、 芳名録に名前を記す

## ファン・ゴッホと日本 略年表

が残されていました。そこには、1920年代に憧れの画家の終焉の地を訪れ、その足跡をたどった日本の画家や文学者たち240名あまりの署名が記されています。

この展覧会では、ファン・ゴッホと日本との相互の関係に2部構成でスポットをあてます。

### 〔第1部 ファン・ゴッホのジャポニスム〕

ファン・ゴッホは、日本から如何なる影響を受け、如何なるイメージを抱いていたのか。国内外のコレクションから厳選したファン・ゴッホ作品約40点と、同時代の画家の作品や浮世絵など50点あまりによって、その実像を多角的に検証します。

### 〔第2部 日本人のファン・ゴッホ巡礼〕

最初期における日本人のファン・ゴッホ巡礼を、ガシェ家の芳名録に基づいた約90点の豊富な資料によってたどります。

日本を夢想したファン・ゴッホ。ファン・ゴッホに憧憬した日本人。交差する夢の軌跡をご覧ください。

1853年にオランダに生まれたフィンセント・ファン・ゴッホは、1886年にパリに移り、この地でさまざまな刺激を受けながら、自らの絵画表現を模索していきます。そこで大きな役割を果たしたものが、日本の浮世絵でした。ファン・ゴッホは浮世絵版画を収集し、それを模写した油彩画を描き、構図や色彩を学び取っていきます。

さらにファン・ゴッホは、浮世絵をはじめとする美術作品や日本を紹介した文章を咀嚼しながら、独自の日本イメージを醸成していきます。1888年には、芸術家たちの共同体を作ろうと南仏のアルルへ赴きました。大いなる期待を胸に訪れたこの地を、彼はしばしば日本と重ね合わせています。ファン・ゴッホにとって日本は、創意の源であり、夢にまで見た理想郷だったのです。

1890年、ファン・ゴッホはパリ近郊のオーヴェール＝シュル＝オワーズで亡くなります。そしてその後、今度は日本人がこの画家を賞賛し、理想化するようになりました。

ファン・ゴッホが最晩年に交友を持ったオーヴェールの医師ガシェの一族のもとには、3冊の芳名録

## CHECK!

### 日本初! ファン・ゴッホ美術館との 本格的国際共同プロジェクト

本展覧会は、過去に日本において開催された「ゴッホ展」の中でも初となるオランダのファン・ゴッホ美術館との国際共同プロジェクトで、日本展終了後、ファン・ゴッホ美術館でも開催されます。

「ゴッホと日本」をコンセプトに日本で企画を立ち上げたのは6年前。その後、ファン・ゴッホ美術館との協議を重ね、2013年から共同企画として、双方の監修者・学芸員が作品選定を行い、一緒に出品交渉を行ってきました。偉大な画家ファン・ゴッホを生んだオランダと、そのファン・ゴッホに大きな影響を与えた日本。この両国で本展が開催されるのは非常に意義のあることと言えるでしょう。

## CHECK!

### 第1部 ファン・ゴッホのジャポニスム

### 日本美術が ファン・ゴッホに 与えた影響を 様々な角度から検証

→詳しくは06ページへ

## CHECK!

### 第2部 日本人のファン・ゴッホ巡礼

### 日本初公開! ガシェ家に残された 3冊の「芳名録」

1920年代以降、ファン・ゴッホに魅せられた日本人の「巡礼」の軌跡をたどります。

→詳しくは11ページへ

## 展覧会の構成



# 第1部 ファン・ゴッホのジャポニスム

## パリー夢のはじまり

ファン・ゴッホの生まれた1853年は日本では黒船来航の年にあたります。開国した日本からは大量の美術品が外国に出て行くこととなりますが、鎖国中も日本と交易のあったオランダで生まれ育ったファン・ゴッホにとって、日本美術はまったく縁遠いものでもなかったはず。実際、ファン・ゴッホの伯父ヤンは海軍軍人としてすでに1860年代に日本に滞在しており、ヤン伯父の家に下宿していたこともあるファン・ゴッホが日本の美術品を見たり日本について話を聞いたりしていた可能性はあります。しかし、オランダ時代のファン・ゴッホの手紙には日本についての記述はまったくといっていいほど見あたりません。彼が日本と日本美術に強い関心を持つようになったのは、1886年にパリに出てきてからのことでした。

### おいらん 花魁



花魁、ガマ、蛙、鶴が別々の版画からとられている。

フィンセント・ファン・ゴッホ《花魁(溪斎英泉による)》  
1887年 油彩・綿布  
ファン・ゴッホ美術館  
(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)蔵  
©Van Gogh Museum, Amsterdam  
(Vincent van Gogh Foundation)

## 芸者と富士



龍明霽谷《芸者と富士》(部分)  
1870年代(明治初期)  
木版、紙(縦大判判りめん絵) 軸装  
ファン・ゴッホ美術館蔵  
©Van Gogh Museum, Amsterdam  
東京では個人蔵作品を展示

### しんばんむしづくし 新板虫尽



二代 歌川芳丸《新板虫尽》(部分)  
1883年 木版、紙(縦大判錦絵)  
ファン・ゴッホ美術館(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)蔵  
©Van Gogh Museum, Amsterdam  
(Vincent van Gogh Foundation)

## うんりゅううちかけ 雲龍打掛 の花魁

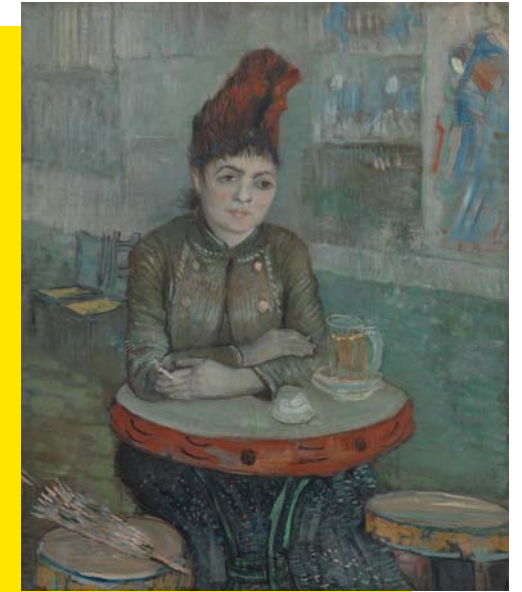


溪斎英泉《雲龍打掛の花魁》  
1820~1830年代(文政後期~天保前期)  
木版、紙(縦大判錦絵、縦2枚続) 千葉市美術館蔵  
東京展後期展示、他の会期では個人蔵作品を展示

ファン・ゴッホは画商ビングの店で大量の浮世絵を見て、その鮮やかな色彩や作品としての質の高さに魅せられます。当時まだ安価だった浮世絵を集め、展覧会を開き、模写をし、肖像画の背景にも描き込みました。ファン・ゴッホはパリで印象派の影響を受け、オランダ時代の暗い色彩を捨てて明るい印象派風の作品を描くようになっていましたが、浮世絵と接することでさらに革新的な独自の絵画を生み出すようになります。後のファン・ゴッホ特有の画風、平坦で鮮やかな色面を使った画風は、浮世絵の研究を通じて生まれてきたものです。

1880年代のパリは、ジャポニスム(日本趣味)の最盛期でした。ファン・ゴッホがパリに出てきた1886年には「パリ・イリュストレ」誌の日本特集号が出され、ファン・ゴッホはこの表紙に使われていた英泉の花魁図を拡大模写して《花魁》に描き込みました。この日本特集号の中の日本紹介文は林忠正が書いたもので、日本の美しい風景の記述はファン・ゴッホにも、彼の同時代人にも、美しい日本のイメージを強く印象づけたことでしょう。おそらくこの頃から、ファン・ゴッホは日本と日本人を理想化し始めていたと思われる。そして彼は、浮世絵の中の鮮やかな色彩世界を求めて、「フランスにおける日本」にあたる南仏へと旅立つことになります。

## カフェ・ル・タンブランの アゴスティーナ・セガトーリ



右上方の絵  
着物姿の女性か?  
フィンセント・ファン・ゴッホ  
《カフェ・ル・タンブランのアゴスティーナ・セガトーリ》  
1887年 油彩・カンヴァス  
ファン・ゴッホ美術館  
(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)蔵  
©Van Gogh Museum, Amsterdam  
(Vincent van Gogh Foundation)

## 三冊の小説

### CHECK!

#### 日本美術が ファン・ゴッホに与えた影響を 様々な角度から検証

ファン・ゴッホが日本美術に大きな影響を受けていたことはよく知られています。本展では、浮世絵の模写、構図や色彩などの表現様式、“ユートピア”としてみている日本のイメージの反映など、様々な角度からファン・ゴッホ作品の日本への影響をひも解きます。世界各国からコンセプトに沿って集められたファン・ゴッホ作品の中には、《タラスコンの乗合馬車》(P.8)、《雪景色》(P.7)など日本初公開作品もあり必見です。あわせてファン・ゴッホが日本美術に魅了されるきっかけとなった数々の浮世絵も展示します。ファン・ゴッホ創造の源泉に触れてください。

フィンセント・ファン・ゴッホ  
《三冊の小説》  
1887年 油彩・板  
ファン・ゴッホ美術館  
(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)蔵  
©Van Gogh Museum, Amsterdam  
(Vincent van Gogh Foundation)



日本の貿易会社名の書かれた楕円の板。その元の用途はこれまでわからず、確かな根拠なく茶箱の蓋などと言われてきた。今回、元の用途が判明。種明かしは展覧会とカタログで。



# 第1部 ファン・ゴッホのジャポニスム

## アルルー「日本」という名のユートピア

ファン・ゴッホは1888年2月20日の早朝、南仏に着きました。この時の列車の車中での気持ちをゴーガンにこう伝えています。「この冬、パリからアルルへと向かう旅の途上でおぼえた胸の高鳴りは、今もいきいきと僕の記憶に残っている。〈日本にもう着くか、もう着くか〉と心おどらせていた。子供みたいだね。」  
南仏での初日は、「60センチを超える」積雪とふりつづく雪の中で始まります。それでも、アルルからの最初の手紙にファン・ゴッホは「まるでもう日本人の画家たちが描いた冬景色のようだった」と記しています。ベルナル宛の手紙には「君に便りをする約束をしたので、まずこの土地が、空気の透明さと明るい色彩効果のためにぼくには日本のように美しく見えるということからはじめたい」と記しています。



**寝室** 「日本人はとても簡素な部屋で生活した。そしてその国には何と偉大な画家たちが生きていたことか」  
「陰影は消し去った。浮世絵のように平坦で、すっきりした色で彩色した」  
フィンセント・ファン・ゴッホ 《寝室》1888年 油彩・カンヴァス ファン・ゴッホ美術館 (フィンセント・ファン・ゴッホ財団) 蔵 ©Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)



**日本初公開**  
フィンセント・ファン・ゴッホ 《雪景色》1888年 油彩・カンヴァス 個人蔵 ©Roy Fox

**雪景色** 「雪の中で雪のように光った空を背景に白い山頂を見せた風景は、まるでもう日本人の画家たちが描いた冬景色のようだった」



**アイリスの咲くアルル風景** 「黄色や紫の花が満開の野に囲まれた小さな町。ほんとうに日本の夢のようだ。」  
フィンセント・ファン・ゴッホ 《アイリスの咲くアルル風景》1888年 油彩・カンヴァス ファン・ゴッホ美術館 (フィンセント・ファン・ゴッホ財団) 蔵 ©Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

「日本美術を研究すると、明らかに賢く哲学的で、知的な人物に出会う。その人は何をして時を過ごしているのだろうか。地球と月の距離を研究しているのか。違う。ビスマルクの政策を研究しているのか。いや、違う。その人はただ一本の草の芽を研究している。(……)どうかね。まるで自分自身が花であるかのように自然の中に生きる。こんなに単純な日本人が教えてくれるものこそ、まずは真の宗教ではないだろうか。」  
「日本の芸術家たちがお互い同士作品交換していたことにぼくは前々から心を打たれてきた。これら彼らがお互いに愛し合い、助け合っていて、彼らの間にはある種の調和が支配していたということの証拠だ。もちろん彼らはまさしく兄弟のような生活の中で暮らしたのであり、陰謀の中で生きたのではない。(……)また、日本人はごくわずかな金しか稼がず、素朴な労働者のような生活をしてきたようだ。」

ファン・ゴッホにとって日本人とは、自分自身が花であるかのように自然の中に生き、深い思想と真の宗教をもち、兄弟のような生活をする貧しく素朴な人間ということになります。つまり、ファン・ゴッホは日本人に自分自身のすべての理想、芸術的、社会的、宗教的理想を結晶化させていきました。そしてその理想を実現すべく、ゴーガンと「黄色い家」での共同生活を始めますが、この生活は1888年12月の有名な「耳切り事件」で崩壊してしまいます。しかし、ファン・ゴッホが日本を夢見ていたわずか一年ほどの期間は、彼にとってもっとも創造性に満ち、そしておそらくもっとも幸福な時期だったと言ってよいでしょう。



**日本初公開**  
「夾竹桃、ああ、それは愛を語る…」  
「ロティの本『お菊さん』は読んだだろうか。とても面白い。」  
フィンセント・ファン・ゴッホ 《夾竹桃と本のある静物》1888年 油彩・カンヴァス メトロポリタン美術館蔵(ジョン・L・ローブ夫妻寄贈) Image copyright©The Metropolitan Museum of Art. Image source: Art Resource, NY

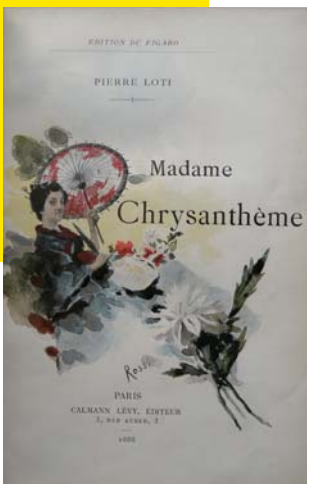
## タラスコンの乗合馬車

日本初公開



「タルタラン(ドーデの小説)に出てくる年老いたタラスコンの乗合馬車の嘆きをおぼえているだろうか」  
フィンセント・ファン・ゴッホ 《タラスコンの乗合馬車》1888年 油彩・カンヴァス ヘンリー&ローズ・パールマン財団蔵 (プリンストン大学美術館 長期貸与) ©The Henry and Rose Pearlman Collection / Art Resource, NY

## 夾竹桃と本のある静物



ピエール・ロティ著『お菊さん』扉絵 1888年 パリ刊 関府寺司氏蔵 会場ごとにページ替えあり



## 第1部 ファン・ゴッホのジャポニスム

### サン・レミ、オーヴェール —遠ざかる日本の夢

#### 蝶とけし

「耳切り事件」の時に襲ってきた精神病の発作は、その後たびたびファン・ゴッホを襲いました。「黄色い家」の崩壊後は、「日本の夢」も遠ざかっていきます。手紙でも日本について語ることはほとんどなくなりました。しかし、ふりかえす発作の合間にもファン・ゴッホは描き続け、それらの作品の中にはまだなお浮世絵の影響を感じさせるものがあります。サン・レミの精神病療養所に入ってから、庭の片隅や植物をクローズアップで描いた作品が増え、それらの何点かは日本の花鳥画を思わせます。また、アルル時代に日本の影響下に描いていた葦ペンデッサンを色彩と統合して、力強い筆のタッチを使った独自の油彩画へと発展させていきました。



フィンセント・ファン・ゴッホ  
《蝶とけし》1889年 油彩・カンヴァス  
ファン・ゴッホ美術館(フィンセント・ファン・ゴッホ財団)蔵  
©Van Gogh Museum, Amsterdam  
(Vincent van Gogh Foundation)

長年にわたってファン・ゴッホを物心両面で支え続けてきたテオは、1889年4月に結婚、翌年1月に子供を授かります。ファン・ゴッホはこの年1890年5月にサン・レミの療養所を出て、パリのテオ一家のもとに三泊してからパリの北西にあるオーヴェール=シュル=オーワーズで生活を始めます。二年余りの南仏生活の半分を「日本の夢」の中に生き、半分を療養所で暮らしてきたファン・ゴッホは、パリで「現実」と直面します。ひとつはテオの家庭とその生活、そしていまひとつは「日本」イメージの急激な変化でした。

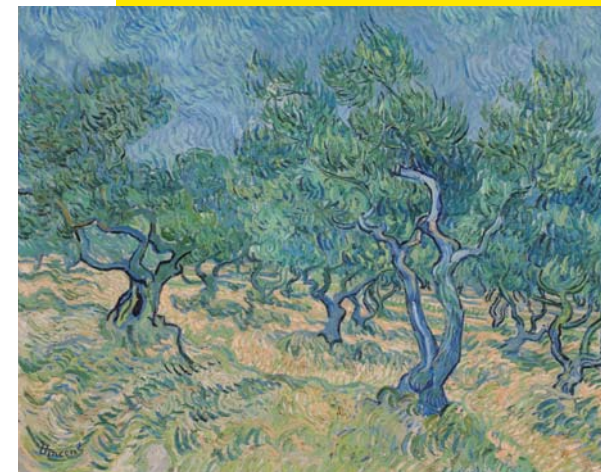


ジークフリート・ビング編『藝術の日本』誌  
第19号の表紙  
1889年11月刊 個人蔵  
会場ごとにページ替えあり

#### 溪谷(レ・ペイルレ)



フィンセント・ファン・ゴッホ  
《溪谷(レ・ペイルレ)》1889年  
油彩・カンヴァス  
クレラー=ミュラー美術館蔵  
©Kröller-Müller Museum, Otterlo



#### オリーブ園

フィンセント・ファン・ゴッホ  
《オリーブ園》1889年 油彩・カンヴァス  
クレラー=ミュラー美術館蔵  
©Kröller-Müller Museum, Otterlo

南仏に心踊らせて向かった二年前とは違い、「日本」は急速に国家と現実にとりこまれつつあり、もはや「楽園」ではなくなりつつありました。フランス政府が日本に派遣した植民地画家デュムランは日本主題の絵を発表しはじめ、ビングは1890年に国立美術学校で大浮世絵展を開き、翌1891年には日本美術が初めてルーヴル美術館に購入されます。日本という国そのものも1889年に立憲国家になり、やがて軍事的脅威とみなされるようになります。つまり、日本はもはや「楽園」としてではなく、現実として見られるようになってきたのです。ファン・ゴッホだけではなく、多くの人々が「日本の夢」から目覚めさせられることになりました。

1890年7月28日、かつてあの屋根裏部屋でファン・ゴッホの「日本の夢」に火をつけた画商ビングは、浮世絵展の功績をみとめられ、レジオン=ドヌール勲章を授与されています。同じ日、ファン・ゴッホは、オーヴェールの屋根裏部屋で腹に銃弾を抱えたまま瀕死で床に横たわっていました。そして日付が変わった翌29日、しずかにこの世を去ります。

ファン・ゴッホの「日本の夢」はオーヴェールで画家の死によって断たれることになりました。しかし、夢は消えてはいなかった。30年余りの時が過ぎ、今度はファン・ゴッホの作品に魅せられた日本の画家たちがオーヴェールを訪れることになります。夢は終わったのではなく、時空を巡って転生していったのです。

#### ポプラ林の中の二人

#### 日本初公開



フィンセント・ファン・ゴッホ  
《ポプラ林の中の二人》  
1890年 油彩・カンヴァス  
シンシナティ美術館蔵  
(メアリー・E・ジョンソン 遺贈)



# 第2部 日本人のファン・ゴッホ巡礼

## オーヴェール巡礼の旅

### ファン・ゴッホの聖地を目指して

ファン・ゴッホの死後、その亡骸はオーヴェールの墓地に葬られ、兄の後を追うように半年後の1891(明治24)年1月にユトレヒトで没したテオの亡骸も1914(大正3)年にその隣に移葬され、以後、兄弟は仲良く永遠の眠りについています。ファン・ゴッホの死から間もない時期に、その作品や生涯を熱心に紹介したのが、小説家の武者小路実篤、画家の斎藤與里や岸田劉生、美術史家の児島喜久雄ら「白樺派」及びその周辺の文学者や美術家たちでした。熱狂の渦は徐々に広がり、大正から昭和初期にかけて、少なからぬ日本人がファン・ゴッホの生の軌跡を求めてオーヴェールへと赴くことになります。その最初の足跡は、ファン・ゴッホの死から四半世紀近く経った1914(大正3)年に刻まれることとなります(山本鼎、森田恒友)、この時ファン・ゴッホの最期を取ったポール=フェルディナ

ン・ガシェは、すでに1909(明治42)年に没していました。しかし、生前ほとんど売れなかったファン・ゴッホ作品の多くは没後もガシェの元に残され、同名の息子がそれらを大切に守り伝えていました。《ガシェ医師の肖像》や《オーヴェールの教会》など代表作を含む20点あまりの貴重なコレクションは、後に8点が国家の所蔵となり、現在はオルセー美術館の至宝となっています。ただ、当時はパリで見ることのできたファン・ゴッホ作品はわずかで、彼の作品と足跡に触れることを求めた日本人たちは、オーヴェールをファン・ゴッホ巡礼の地と定めることとなります。ガシェ家には、来訪した日本人の名が記された芳名録3冊が残されました。それらは現在パリのギメ東洋美術館に所蔵されていますが、本展の第2部では、これらの芳名録を日本で初めて公開し、1920年代を中心に近代日本の知識人たちによるオーヴェール巡礼の実相を紹介します。



結城素明《ガシェの肖像》  
1924年 墨・紙 国立ギメ東洋美術館蔵  
Photo ©RMN-Grand Palais  
(Musée Guimet, Paris) /  
Thierry Ollivier / distributed  
by AMF-DNPartcom  
札幌、京都の2会場のみ展示

## CHECK!

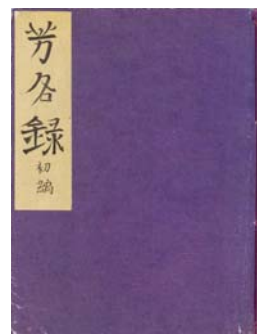
### 日本初公開! ガシェ家に残された 3冊の「芳名録」

ファン・ゴッホの死後、彼が眠るオーヴェールの地で20点ほどの作品を大切に所蔵していた医師ポール=フェルディナン・ガシェとその一家。ファン・ゴッホに強い憧れを抱いていた日本の学者や芸術家たちが後にそのガシェ家を訪れ、「芳名録」に名前を残したことがわかっています。本展では、日本初公開となるフランスのギメ東洋美術館所蔵の「芳名録」を軸に、里見勝蔵、佐伯祐三、斎藤茂吉、式場隆三郎ら当時の日本人の視点からも、「時代」と「国境」を越えたファン・ゴッホと日本を巡る夢の変遷をたどります。

### 芳名録 I: 初編 1922年/17.3×14.0 cm/26名署名

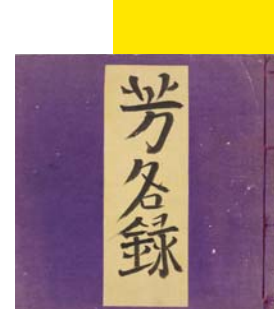
1922(大正11)年の訪問者を証言する1冊目の芳名録に最初の記念すべき署名が記されたのは3月9日、それは画家・黒田重太郎によるものでした。7月には白樺派の児島喜久雄が、9月には画家の中澤弘光や間部時雄ら、美術関係者の訪問が記されています。中澤と間部は、ともに現地でスケッチも描き、詳しい訪問記を残しています。しかし、日本の画壇への影響という点で重要な役割を果たしたのが、彼らに続いた里見勝蔵でした。里見は、日本の近代絵画史において色彩表現の可能性を追究した画家のひとりです。20世紀初頭のフランスで展開したフォーヴィスム(野獣派)を代表する画家で、当時オーヴェール在住の

モーリス・ド・ヴラマンクに画家・佐伯祐三を引き合わせたことでも知られています。本場フランスのフォーヴの画家たちも大きな影響を受けたファン・ゴッホ作品と直に出会えたことは、色彩表現の革新を推し進めた日本のフォーヴ運動にとっても、重要な意味を持つ出来事でした。ファン・ゴッホの実作を目の当たりにし、生前のファン・ゴッホを知るガシェの息子ポールから聞く話は、それまで雑誌「白樺」等を通じて得ていた画家像をより具体化させる契機となりました。本展では、中澤がオーヴェールで描いたスケッチや旅日誌、里見と間部の現地での交流関係を示す写真や手紙などの貴重な資料によって、初期のオーヴェール巡礼の様子を紹介します。

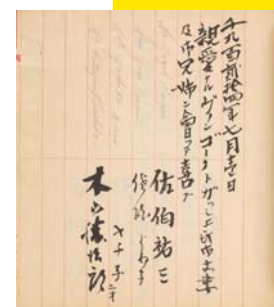


上/「芳名録 I: 初編」表紙 1922年  
国立ギメ東洋美術館蔵  
Photo © RMN-Grand Palais (Musée Guimet, Paris) /  
Thierry Ollivier / distributed by AMF-DNPartcom

下/「芳名録 I: 初編」黒田重太郎の1922年3月9日の署名  
国立ギメ東洋美術館蔵  
Photo © RMN-Grand Palais (Musée Guimet, Paris) /  
Thierry Ollivier / distributed by AMF-DNPartcom  
会場ごとにページ替えあり



「芳名録 II」表紙  
1922~28年  
国立ギメ東洋美術館蔵  
Photo © RMN-Grand Palais  
(Musée Guimet, Paris) / Thierry Ollivier /  
distributed by AMF-DNPartcom



「芳名録 II」佐伯祐三一家と友人・木下勝治郎の1924年7月1日の署名  
国立ギメ東洋美術館蔵  
Photo © RMN-Grand Palais  
(Musée Guimet, Paris) / Thierry Ollivier /  
distributed by AMF-DNPartcom  
会場ごとにページ替えあり

### 芳名録 II 1922-28年/23.0×23.0 cm/141名署名

最初の日本人訪問が記された1922(大正11)年以降、20年代にオーヴェール巡礼を行う日本人は次第に増加してゆきます。2冊目の芳名録では、日本におけるフォーヴ運動をリードした一九三〇年協会から独立美術協会へと至る過程で、その中心的な役割を果たした前記の里見勝蔵のほか、佐伯祐三、前田寛治、小島善太郎ら洋画家の署名がまず目を惹きます。その一方で、巡礼を行った者たちには、土田麦僊、小野竹喬ら国画創作協会の中心メンバーとなった日本画家たちもいました。

セザンヌやファン・ゴッホ、ゴーガンに代表されるポスト印象派の芸術は大きなインスピレーション源となっていました。油彩画であれ、日本画であれ、その表現手法は異なっても、強烈な色彩表現を見せるファン・ゴッホの作品は、若い日本人画家たちにとっては、近代的な自我に目覚めた芸術家としての規範ともなったのです。本展では、佐伯の《オーヴェールの教会》や前田の《ゴッホの墓》など、巡礼から生まれた日本近代絵画の名作のほか、写真や手紙などの豊富な資料、さらには日本画家・橋本関雪がガシェ家訪問を記録撮影した極めて貴重な動画も紹介します。



佐伯祐三《オーヴェールの教会》1924年  
油彩・カンヴァス 鳥取県立博物館蔵



前田寛治《ゴッホの墓》1923年  
油彩・カンヴァス 個人蔵  
画像提供: 鳥取県立博物館



ファン・ゴッホ兄弟の墓の写真  
オーヴェール=シュール=オワーズ



## 芳名録Ⅲ：出頭没頭

1929-39年／19.0×27.0 cm／94名署名

1929(昭和4)年から10年間に渡る訪問を証言する3冊目の芳名録では、30年代から戦後にかけて日本におけるファン・ゴッホ受容に最も重要な役割を果たした人物の名が登場しています。それは、精神科医にしてファン・ゴッホ研究に生涯を捧げた式場隆三郎です。ファン・ゴッホの精神疾患に関する論文で学位を取得した式場は、数多くの研究書、書簡集の翻訳、複製画による展覧会、版画家・奥山儀八郎の協力による複製版画制作などの活動を通じ、ファン・ゴッホの芸術と生涯を世に広めるのに多大な影響を及ぼしました。同じ精神科医で、ファン・ゴッホを敬愛した歌人・斎藤茂吉の薫陶も受けた式場は、精神科医としての関心の範疇を大きく超えて、研究や紹介にとどまらず、日本におけるファン・ゴッホ神話の形成に重要な役割を果たしてゆきます。本展では、式場からガシェに贈られた書籍類や手紙、写真などによりガシェ家との交流関係を紹介し、日本におけるファン・ゴッホ受容の一端を紹介します。



『芳名録Ⅲ：出頭没頭』表紙 1929～39年  
国立ギメ東洋美術館蔵  
Photo © RMN-Grand Palais (Musée Guimet, Paris) / Thierry Ollivier / distributed by AMF-DNPartcom  
会場ごとにページ替えあり



ガシェ家を訪れた高田博厚(左から2人目)と日本人たち  
1939年4月23日 個人蔵



フィンセント・ファン・ゴッホ  
《ガシェ博士の肖像》1890年 エッチング・紙  
東京藝術大学大学美術館蔵  
東京はブリヂストン美術館所蔵作品を展示

## クレラー＝ミュラー・コレクションへの巡礼

作品だけでなく、次第に伝説化、神話化されてゆくファン・ゴッホの生涯そのもの、新しい芸術の創造を目指し、苦悶する近代日本の芸術家たちの精神的な拠り所となりました。そして、それは美術の世界に止まるものではありませんでした。もともとファン・ゴッホに熱狂した白樺派の人々は文学者が中心であり、作品以上にその悲劇的な生涯への関心が強かったことが、日本でのファン・ゴッホ受容に見られる特質となっています。ガシェ家の芳名録では、歌人・斎藤茂吉の署名(1924年11月2日)がその象徴的な存在といえます。精神科医でもあった茂吉は、医学研究のためヨーロッパに留学しますが、西洋美術、とりわけファン・ゴッホへの関心を深めてゆきます。オーヴェールで茂吉はファン・ゴッホをテーマに歌も詠んでいますが、これは、全集未収録の知られていなかった作品です。

一向に澄みとほりたる  
たましひの  
ゴオホが寝たる  
床を見にけり

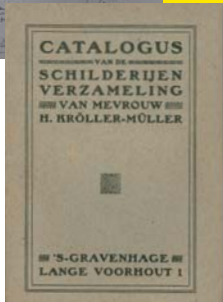
(斎藤茂吉)

オーヴェール巡礼に先立つ9月には、当時まとまったコレクションを形成していたオランダのクレラー＝ミュラー家のファン・ゴッホ作品を見るため、茂吉はハーグにも足を運んでいます。実業家アントン・クレラーの妻ヘレーネが収集したそのコレクションは、今日、オッテルローのクレラー＝ミュラー美術館で公開されていますが、1920年代、ハーグにあった会社の本部でファン・ゴッホ以外の作品も含めて公開の機会があったのです。1929(昭和4)年に公開された際の芳名録にも、画家の荻須高德や佐分真ら日本人の名前が散見され、オーヴェールに加え、もうひとつのファン・ゴッホ巡礼地となっていたことがわかります。本展では、このクレラー＝ミュラー家の芳名録や当時の展示風景写真、展示目録など貴重な資料を紹介します。



クレラー＝ミュラー・コレクションの展示風景(ハーグ)  
1933年 クレラー＝ミュラー美術館蔵  
© Kröller-Müller Museum, Otterlo

「ファン・ゴッホ展 1929」の芳名録  
佐分真の署名のページ 1929年9月28日  
クレラー＝ミュラー美術館蔵



H. クレラー＝ミュラー夫人の  
絵画コレクション目録 表紙  
1921年 クレラー＝ミュラー美術館蔵

# SAPPORO

## 札幌展

会場 北海道立近代美術館  
北海道札幌市中央区北1条西17丁目 TEL 011-644-6882  
会期 2017年8月26日(土)～10月15日(日)  
開館時間 9:30～17:00 ※会期中の金曜日は19:30まで(入館は閉館の30分前まで)  
休館日 月曜日(9/18、10/9を除く)、9月19日(火)、10月10日(火)  
主催 北海道立近代美術館、北海道新聞社、NHK札幌放送局、NHKブラネット北海道  
後援 外務省、オランダ王国大使館、北海道、北海道教育委員会、札幌市、札幌市教育委員会、北海道PTA連合会、北海道小学校長会、北海道中学校長会、北海道高等学校長協会、北海道私立中学高等学校協会、北海道私立専修学校各種学校連合会  
特別協賛 大和ハウス工業  
協賛 損保ジャパン日本興亜  
協力 KLMオランダ航空、日本航空、ヤマト運輸  
共同企画 ファン・ゴッホ美術館  
観覧料 一般1,500円(1,300円)、高大生800円(600円)、中学生600円(400円)、小学生以下無料(要保護者同伴) ※( )内は10人以上の団体料金

# TOKYO

## 東京展

会場 東京都美術館  
東京都台東区上野公園8-36 TEL 03-5777-8600 (ハローダイヤル)  
会期 2017年10月24日(火)～2018年1月8日(月・祝)  
開室時間 9:30～17:30  
※会期中の金曜日、11月1日(水)、2日(木)、4日(土)は20:00まで(入室は閉室の30分前まで)  
休室日 月曜日(1/8を除く) 年末年始休館 12月31日(日)、1月1日(月・祝)  
主催 東京都美術館、NHK、NHKプロモーション  
後援 外務省、オランダ王国大使館  
協賛 損保ジャパン日本興亜  
協力 KLMオランダ航空、日本航空  
共同企画 ファン・ゴッホ美術館  
観覧料 一般1,600円(1,300円)、大学生・専門学校生1,300円(1,100円)、高校生800円(600円)、65歳以上1,000円(800円)  
※( )内は前売りと20人以上の団体料金 ※中学生以下は無料

# KYOTO

## 京都展

会場 京都国立近代美術館  
京都府京都市左京区岡崎円勝寺町 TEL 075-761-4111  
会期 2018年1月20日(土)～3月4日(日)  
開館時間 9:30～17:00 ※会期中の金・土曜日は20:00まで(入館は閉館の30分前まで)  
休館日 月曜日(2/12を除く)、2月13日(火)  
主催 京都国立近代美術館、NHK京都放送局、NHKブラネット近畿、京都新聞  
後援 外務省、オランダ王国大使館  
協賛 損保ジャパン日本興亜、タキイ種苗  
協力 KLMオランダ航空、日本航空  
共同企画 ファン・ゴッホ美術館  
観覧料 ●当日券／一般1,500円(1,300円)、大学生1,100円(900円)、高校生600円(400円)  
●早割ペア券／2枚で2,000円(一般のみ、1名様で2回使用可)  
※( )内は前売りと20名以上の団体料金  
※中学生以下、心身に障がいがある方と付添者1名は無料(要証明)  
※早割ペア券は2017年10月1日から10月31日まで、前売券は2017年11月1日から2018年1月19日まで、それぞれ期間限定販売

# Van Gogh & Japan ゴッホ展

巡りゆく日本の夢

展覧会公式サイト <http://gogh-japan.jp>

報道機関お問い合わせ

〈札幌展、東京展〉 ゴッホ展 広報事務局(プラチナム内) 担当:金・森  
TEL 03-5572-7351 / FAX 03-3584-0727  
MAIL [gogh-japan.pr@vectorinc.co.jp](mailto:gogh-japan.pr@vectorinc.co.jp)

〈京都展〉 ゴッホ展 広報事務局(TMオフィス内) 担当:馬場・石原  
TEL 06-6231-3350 / FAX 06-6231-4440  
MAIL [gogh-japan@tm-office.co.jp](mailto:gogh-japan@tm-office.co.jp)